

団体名：シャンティ国際ボランティア会

国名：アフガニスタン

日付：2019年7月23日

報告書名：平成30年度 ジャパン・プラットフォーム 完了報告書

平成30年度 JPF 完了報告書

2019年7月23日

事業名	ナンガハル県及びクナル県における国内避難民及び帰還民の子どもの保護支援事業 Child Protection Assistance to Returnees and IDPs in Nangarhar and Kunar Province	
事業対象地	アフガニスタン ナンガハル県・クナル県	
事業期間	事業期間：2018年4月1日～2019年3月31日	
公的資金種別	ジャパン・プラットフォーム	
総支出・返還金	総支出：45,089,064円（確定返還額：2,765,250円）	
プロジェクト目標および、その達成度	紛争の影響によって避難を余儀なくされた国内避難民の児童及びパキスタンからの帰還民の児童が、被災の体験を克服し避難地域での必要な心理社会的支援や教育を受けられるように、本事業では、アフガニスタン東部のナンガハル県及びクナル県において、国内避難民及び帰還民の子どもの対象に、1) CFSの設置と運営を通じて、809人の子どもたちに安全で快適な場所での心理社会的支援の機会を提供した。また、2) 学習コースを通じ、学習の機会を失った335人の子どもたちに安全な教育の機会を提供した。さらに、3) 1947人の児童にたいして、児童数過多により教室が飽和状態にある学校に仮設教室を設置し、学習キットを配布することで、劣悪な教育環境の整備に貢献した。水環境を含む学習環境の整備がされることを目的にこの事業を実施した。	
実施内容 概要	(1) 子どもにやさしいスペース（Children Friendly Space）の開設 4つの子どもにやさしいスペースを開設し、運営を通じて、子どもたちに対して心理社会的支援の機会を提供。麻薬使用防止や環境教育、人権啓発などを盛り込んだ月例イベントを実施し、3,436人の児童が参加した。	対象地域の帰還民、国内避難民、ホストコミュニティの子ども合計809人
	(2) 学習コースの設置 4つの学習コースを開設し、335人が登録され1日平均230人が出席した。出席率などの基準をクリアした合計288人の児童が、学習コースで学習したことを証明する書面を受け取った。	対象地域の帰還民、国内避難民、ホストコミュニティの児童335人
	(3) 仮設教室の設置 2つの郡の3校を対象にし、合計5棟15教室の仮設教室を設置した。	仮設教室裨益者 ：2,329人（児童・生徒） 水衛生施設裨益者 ：5,912人（児童） 1,445人（中高生）

団体名：シャンティ国際ボランティア会

国名：アフガニスタン

日付：2019年7月23日

報告書名：平成30年度 ジャパン・プラットフォーム 完了報告書

成果	<p>(1) 子どもにやさしいスペース (Children Friendly Space) の開設</p> <p><b>「全期間を通して合計 809 人の子どもが登録され、累計 66,988 人が来館した。」</b></p> <p>CFS を計 4 館開設した。それぞれの CFS に 2 名、合計 8 名の運営スタッフを配置し、開館前および開館 4 ヶ月後にそれぞれ研修とフォローアップ研修を実施した。また、事業期間中、当会スタッフによる定期的なモニタリング時に指導を行なった。CFS は合計 182 日間開所し、累計 66,988 人の来館、1 日平均 368 人の利用があり、全期間を通して合計 809 人の子どもが登録された。</p> <p>質的な成果として、CFS の活動を子どもが主体的に行うようになったという変化が挙げられる。具体的には、毎月実施した月例イベントにおいて、テーマに沿ったイベントの内容や出し物を子どもたち自身と CFS スタッフが一緒になって考え、それぞれの CFS で子どもたちが大勢を前に詩を朗読やスピーチ、劇を披露するなど、工夫を凝らしたイベントが実施された。CFS のなかには、月例イベントだけでなく、子どもと CFS スタッフが自発的にイベントを企画して開催したり、クリケットチームを組織したりするなど、子どもたちだけでなく関わった CFS スタッフの主体性が高まっていることがうかがえた。また、子どもの行動の変化は、数ヶ月おきに実施した児童の行動観察の調査においても見られた。</p> <p>(2) 学習コースの設置</p> <p><b>「合計 4 つの学習コースを開設し、335 人が登録され、1 日平均 230 人が出席した。」</b></p> <p>最低でも 2 ヶ月間学習コースに通ったこと、出席率が 70%以上だったこと、最低でも 1 度定期テストを受けたこと、という基準をクリアした合計 288 人の児童が、学習コースで学習したことを証明する書面を受け取った。活動の成果として、1) 本コースに参加した児童の定期テストにおける点数が上昇した。定期テストは学習コース開始から 1 ヶ月後、5 ヶ月後、終了月に行い、3 回参加した児童の平均点について、2 年生、3 年生それぞれ 6.83 点、6.93 点の上昇が見られた。2) 学習コースを修了した児童の 4 割程度が、公立校へ編入する見込みとの報告を受けた。現地では新学期の開始が事業期間後だったため、実際の数字は分からないものの、当会現地スタッフの試算では、学校への距離が遠いことや学齢期に達していないなどの理由がない 4 割程度が、公立校へ編入する見込みとのことだった。3) 学習コースに登録した児童が自ら興味を持って CFS の月例イベントに参加したり、CFS の図書を借りるようになり、学習コースに参加する児童の読書や他者と関わる意欲が向上したといえる。これは、CFS と学習コースを同一の建物内で実施したことによる副次的効果だと捉えている。</p> <p>水衛生啓発・教育活動を通し、コミュニティ住民 740 世帯および支援対象校の児童 5,912 人と中高生 1,445 人が自身を保護する衛生管理の知識を得る機会を得た。コミュニティ衛生啓発について、調査対象全 74 世帯 (148 人) 全員の事後調査の正答率</p>
----	---

団体名：シャンティ国際ボランティア会

国名：アフガニスタン

日付：2019年7月23日

報告書名：平成30年度 ジャパン・プラットフォーム 完了報告書

	<p>が事前調査よりもそれぞれ向上し、平均正答率は事前調査時の27%から、事後調査では98%に上がった。コミュニティでの副次的な効果について、活動対象世帯以外のコミュニティ住民累計848人も衛生啓発活動に参加した。追加の参加者からは、これまで水系感染症に関する知識を有していなかったが、これらを予防し安全に水を利用する手立て（水のろ過方法など）を得たといった声が聞かれた。また、各家庭でトイレの建築や修繕、植樹や清掃活動が始まった。アフガニスタンの祝日、Ashar Day（社会奉仕の日）に、事業対象地で初めて感染症予防を目的とした清掃活動が実施された。学校衛生教育について、調査対象120人全員の事後調査の正答率が90%以上であることを確認した。平均正答率は、事前調査は10.8%、事後調査は96.1%だった。学校での副次的な効果について、教員が自主的に、中高生にも衛生教育を実施した。全生徒を対象とする来年度の衛生教育計画が策定された。</p> <p>（3）仮設教室の設置</p> <p><b>「1棟3教室をそれぞれ3棟、1棟、1棟、合計5棟15教室のTLCを設置した。」</b></p> <p>教室利用者数は、ナンガハル県 Rodat 郡の Shaheed Wafiullah Samee Middle School（以下、「支援対象校①」）1,192人（男性1,192人）、クナール県 Asadabad 郡の Marawara Girls School（以下、「支援対象校②」）368人（男性203人、女性165人）、Yargul Denee Madrasa 校（以下、「支援対象校③」）387人（女性387人）だった。学習キットは、支援対象校①に1,023セット、支援対象校②に800セット、支援対象校③に556セットの学習キットを配布した。キットの内容は、ペン、ノート、鉛筆、色鉛筆、消しゴム、鉛筆削り、かばんだった。また、それぞれの支援対象校に対し、教師用かばん、教室セット（チョーク、黒板消し、ペン、ノート、ゴミ箱、掃除用ほうき、カレンダー、アルファベットチャート、衛生教育や地雷に関する保護ポスター、水タンク）を配布した。</p>
課題と対応策	<p>以下のような課題が見られた。</p> <p>本事業では、どの程度質的なデータが取得可能か実験的に試みたが、例えば心情を尋ねるインタビューでは子どもが大人の男性に対し思ったことを自由に表現できないなど、事業担当者だけでは十分なデータを得ることが難しいケースがあった。また、フォームの使い方やデータの取得方法に課題があり、結果的に現地スタッフが独断でフォームを一部改訂して使用するなど、1つ目の学びにつながる点もあった。事業途中からモニタリングに特化したスタッフを追加することで、モニタリングを通じた事業の改善ができるようになったことから、モニタリングスタッフを別途雇用することが重要であった。また、資材価格が不安定な状況への対応である。今回は資材の高騰により、当初計画していた予算に変更をかける必要があることが、事業期間中の試算によって予測された。しかしながら、最終的な支出は、現地職員の努力もあり、その予測を下回った。今まで以上に現地と密なやり取りを行ない、工事の進捗や予算</p>

団体名：シャンティ国際ボランティア会

国名：アフガニスタン

日付：2019年7月23日

報告書名：平成30年度 ジャパン・プラットフォーム 完了報告書

	執行状況を詳細に把握して、迅速に対応できるようにしておく必要があった。
教訓・提言	<p>本事業のコンポーネントの教訓として、遠隔での事業実施における現場と本部のコミュニケーションがある。事業目的や各種成果のための活動の共有を行っているが、遠隔のため活動の意図について十分に共通理解を得ることが難しいケースがあった。例えば、本事業では、CFS に来館した子どもの数を数えることで、どれほどの子どもに活動を提供できているかを測ることを目的としていたが、現場では CFS に登録された子どもで来館している子どものみを数えており、一定期間は実際の来館者より少ない数が報告されていた。来館した全ての子どもを数えるということは、直接話す機会が多ければ自然と伝わっていた事項と思われ、第3国会議の重要性が増した。</p> <p>本事業のコンポーネント2の教訓として、対象者選定の難しさがある。例として、対象者の選定について活動実施の担当者に共有がうまくされておらず、学校に通えていない学齢期の児童に教育の機会を提供することが趣旨だったが、既に公立校へ通う児童が登録されていることがモニタリングで判明した。一方で、ナンガハル県では季節ごとに子どもが流動的に入れ替わる習慣があり、一定期間決まった児童の参加を見込むことが難しいこと、また、学校には通っているが、更に勉強したいという児童が一定数いたという状況があった。対応としては、コースの修了を目的とする児童に加え、そうではない児童も少数受け入れることとした。成果目標を主眼にしながらい、柔軟な対応が可能となるスペースを、活動内に設けることが重要であった。3つ目として、学校外教育の機会それ自体がナンガハル県の僻地においてはニーズがあり、それは児童だけに限られないということである。事業期間中に、CFS に通う子どもの母親が、自分も読み書きを勉強したいとして学習コースに参加したことがあった。当会としては安全面の問題から、児童を対象とした活動が行なわれる建物で成人女性に勉強を教えることはできないことを説明して継続参加を断ったが、教育機会に恵まれなかった成人（特に女性）にも学習ニーズがあった。この事例から、保守的な現地において、外出等が制限される女性にリーチしていく活動を今後検討する必要がある。</p> <p>本事業のコンポーネント3の教訓として、外部要因の発生に実際に対応することの難しさがある。本事業実施期間中には、DoRR や DoE の庁舎への直接攻撃や、学校への脅迫状の配布、選挙による学校の一時休校など、外部環境の変化による本事業への影響があった。また、天候の変化も相まって、工期へ影響が生じ、複数の外部要因への対応が必要となった。本事業では、コミュニティを通じたアクセスの維持や、迂回路の確保などにより事業継続に努力したが、活動の一時休止など柔軟な対応が心がける必要がある。</p>

団体名：シャンティ国際ボランティア会

国名：アフガニスタン

日付：2019年7月23日

報告書名：平成30年度 ジャパン・プラットフォーム 完了報告書

--	--